

庄内協同ファームだより

No.124 2008年7月号



発行/
〒999-7631 山形県鶴岡市八色木字西野338
tel.0235-78-2120 fax.0235-78-2140
http://www.shonaitfarm.com



所有する山林の畑の草刈りをする土岐さん

今年の春は穏やかな日が続き、乾土効果（土壌中の窒素の肥効が現れる）が期待できる年になり、順調な滑り出しかと思われました。しかし、五月中旬の田植期には、肌寒く風の強い日が続きました。今六月中旬には、降雨がほとんどない天候にもかかわらず、稲の生育は例年より7日から10日ほど遅れています。回復することを願っています。

私は去年に還暦を迎えましたが、思わぬ事態に直面しました。就農以来、春作業（機械の共有を含む）を共同でやってきた友を病で失うことになりました。

彼には後継者となる人がいません。彼の耕地2haを引き受けることになりました。この年齢になり面積拡大することとなるとは、自身の後継問題も目前の課題なのである。これから何年やっていけるのか早く引き受け手を捜さないといけないのかと考えることがあります。

20代に県主催の「林業教室」に参加したことがある。3回に分割の15日ほどの日程だったのかと思います。林業の衰退が現実のものとなり始めた時期だったかと思えます。林家が立木で業者に販売する場の演習もあった。その価格算定の基本は当然ながら市場価格が基礎となり、中間経費（伐採、運賃、製材費用等）を控除し最後が生産者の売価と計算されます。経済常識では当然のことと思われませんが、生産にかかわるものとしては釈然としない感情を抱きました。生産に掛かったであろう費用、再生産の費用などは担保されません。この時期から林地の手入れは遣らなくなり、当然伐採も激減していきます。放置されていきます。所有することすら負担となつてきます。

林地も田畑も地域が一体となり周辺の環境を維持してありますが、この作業等が出来なくなり限界集落となつていきそうです。私の住む所は背後に山林を抱えている地域です。ただ単に経営が成り立たなくなっただけでなく、古くからの地縁関係もくずれ荒れていくのでしょうか。

土岐信哉

組合員 訪問

その16

小野寺 喜作さん
美佐子さん

我が子に安全・安心な食べ物を食べさせたいという素朴な親心から、無農薬、有機栽培に突き進んできた小野寺喜作さんと美佐子さん夫妻。強い思いはもつと外へと広がり、農家民宿や農家レストランの

生きることに直結している 食の大切さを発信したい

開設につながっている。

無農薬無化学肥料にこだわるのは食べるものだから、できれば農薬や化学肥料は使いたくないと思ってきたが、庄内協同ファームに参加して環境や体への悪影響を勉強すればするほど、思いを強くした。

子どもを丈夫に育てたいというのも原動力。そのために何をするかと考えたとき、安全なもの、手づくりのものを食べさせたいと思った。安全な野菜で体の中から丈夫な子どもにしたかった。だから、子どもたちにとってカッターメニューは憧れ、そしてついつい感覚がたまたまだった。

子どもたちの年齢差がほぼ年子で続い

ていたため、だれかが病気になるとその子だけに手をとられて、兄弟をしつかり見てやれなかったり、次々に感染して医療費がばかにならなったり。丈夫が一番だと実感していたので。

農作業の手伝いもさせた

仕事をきっちりできる子に育てることも目標だった。小さいころから農作業に連れ出し、親子で働いた。近所の人からはカルガモの親子のようと言われていた。子どももよい体験だったという。特に草むしりは集中力を養うのにとてもよかった。

野菜の宅配もしていた

大規模に米だけを作る農家より、多様な作物を自給的に作る豊かな農業をしたいと考え、さまざまな種類の野菜を無農薬無化学肥料で作っていたことから、家族で食べきれないものを市街地で売り歩いてみた。お客さんに評価され、言はれるのはうれしかった。子どももそんな様子を見て、農業に興味を持ったのか、自分で小さい畑を作っていた。家族の生活と農業は密接につながっていたと思う。

水田はアイガモ農法で



アイガモにして約十五年になるが、毎年天候が違ったため、毎年違う苦労がある。今年は力毛を入れてから寒い日が続き、力毛の動きが鈍ったところでカラスに狙われた。アイガモ農法はカラスとの戦いという一面もある。自分の服を着せた力カシを立ててみたが全く効果なし。人を雇って見張りをしてもらったときは効果があったが、やめたとたんにやられた。カラスとの根競べのようなもの。

農家民宿、農家レストランはなぜ

もともと協同ファームのお客さんとの交流会などで、組合員が手分けして自宅に泊めていたことから、宿泊機能も必要だと思ったことがきっかけ。一般客も受け入れられるように整備してから八年経った。泊まってくれた人が料理をほめてくれるので、

レストランもやってみよう。生きることに直結している食の大切さを発信したい。自分たち農家が育んできた郷土料理を大切にしたいという思いもある。

夫婦の協力も大切

農家民宿には夫婦連れのお客さんが多く、お客さんをもてなすことで夫婦として改めて向き合うことができた。サービスピ精神を発揮してお客さんをもてなす



ことで、互いに今までは違う面もできて、このごろよいパートナーに成れてきたと感じている。

農業に向かう基本姿勢は

農業はやりがいがあるし、将来もあると考えている。やりがいのある農業が儲かる農業とは限らないが、機械化で効率化を追求するよりは人に働いてもらって収入を分け合う方が楽しい。あくせく忙し過ぎるほど働いてへとへとになるよりは、生きる楽しみを実感しながら働きたい。これまでも収入は多くはなかったが楽しかった。

協同ファームのメンバーが多方面で頑張っていてそれが刺激になっている。その中で自分たちなりに考えて形にしたのが、農家民宿や農家レストランだったと思う。

プロフィール

小野寺喜作(五三)、美佐子(五五) 鶴岡市福田家族 夫婦、母の三十八人の子もたちはそれぞれ独立

経営規模 ひとめほれ〇・八畝、わのもち・九畝、だだち豆・九畝、へちま四五畝、野菜二畝、口リ数本

趣味 喜作さんは人と話すこと、特にお酒を楽しむながら、美佐子さんは料理とものに好きなことを仕事にしていることが、頑張る原動力となっているよう。夫婦の価値観や志向性がとても似ているという。

庄内特産だだちや豆

有機栽培の枝豆作りを初めて8年目を迎えます。この間思うような収穫も出来なかつたりと、消費者やお取引先にはご迷惑をお掛けした年もありました。害虫や除草対策には、毎年神経を使いますが、今では有機農法にも、生産者の皆さんそれぞれがかなり手応えも感じ初めて来ております。地球規模での温暖化の影響からか、昔から肌で感じていた季節の天候も変わって来ていると農家の方も話しています。今年はとりわけ、東からの風(地元方言でダシの風)が多い年でもあります。表面上は多少早生種に被害もありますが、本当に見た目くらしいの被害なのか今後心配ではありません。しかし不安の中でも花は咲き始めました。写真では解りづらいかも知れませんが、一週間程経過した状態です。このまま順調に育つてくれますと、丁度7月下旬から8月上旬に収穫、出荷が可能です。



豆独特の香りとコクを是非味わってください

写真は、枝豆部会長の佐藤清夫さんが、除草をしているところです。

有機栽培の為に手作業での除草がこれから続きます。夏の風味、一度食べたらず又食べたくなる、だだちや

Let's クッキング

食欲の衰える秋、冷たい漬け物で食欲増進!!



きゅうりの辛子漬け

作り方 Aを混ぜ合わせビニール袋に入れ、洗ったきゅうりをその中に入れ、よくまぶす。空気を抜いて口を縛り、冷蔵庫に入れる。きゅうりがしんなりしたら袋の口を縛り直す。漬けこんでから一週間位で食べられます。3日に1度、3回かき混ぜます。(ビニール袋に入れたまま、もみ混ぜてください) 葉々のキッチンより抜粋

材料

- ・きゅうり...1kg
- A {
 - ・塩.....80g
 - ・砂糖.....80g
 - ・和辛子...大さじ3

黒川能 水焰の能

鶴岡市黒川地区(旧櫛引町)に伝わる、国重要無形民俗文化財「黒川能」を上演する「水焰の能」が7月26日、同市櫛引総合運動公園野外ステージで開催される。幽玄の美の底に、農民が守り続けてきた生活に根ざした信仰とたくましさを感じられる。

黒川能は同地区に鎮座する春日神社の氏子たちが上座と下座に分かれ、500年もの間、連綿と受け継いできた農民能。世阿弥が大成した後の猿楽能の流れをくみ、現存の五流と同系だが、独自の伝承を続けてきた。中央ではすでに滅びてしまった古い演目や演式を数多く残す。演目は能540番、狂言50番を数え、能面230点、能装束400点を有する。

水焰の能は昭和59年に始まった。水上に組んだ舞台の上でかがり火を焚いて能を上演する夏の風物詩。能を通して、基幹産業である稲作や生命の源である水と生活文化の源である火を融合させ、故郷の豊かな実りと人々の健康を祈るもの。多くの人が黒川能に触れる貴重なイベントとなっ

ている。

今年の演目は上座の能「大般若」「淡路」、狂言「つんぼ座頭」の3番。大般若は、経典を求めて天竺を目指す玄奘三蔵に砂漠の主・深沙大王が大般若経を与える話。淡路は、淡路島にきた帝の臣下にイザナミが国造りの様子を見せ、御世を寿ぐ話。後シテの舞や謡など見どころがたくさんある。

料金は高校生以上前売り2000円、当日2200円。7月17日まで電話かファックスで申し込みが必要。



⑤ 鶴岡市櫛引庁舎商工観光班

☎0235-57-2115、FAX0235-57-2117

訃報

当法人の理事である齋藤健一(59歳)が6月18日突然歸らぬ人となってしまいました。

庄内協同ファームの前身である庄内農民レポートの時代から農業のあるべき姿を求め、その後の、庄内協同ファームの礎を築き、今日まで多大な貢献をしてくださいました。

今では栽培する農家も少なくなって来た(サンジュエルメロン)の生産者でもありました。

いまだに信じがたいことではありますが、これまでの厚誼に深謝致しますと共に、あらためてご冥福をお祈り致します。

へんりれー 徒然草

五十嵐ひろ子



また、大切な仲間を失ってしまった。6月18日、齋藤健一さんは、

還らぬ人となってしまった。庄内協同ファームのメンバーは、誰もがやりきれない気持ちに押しつぶされそうになった。「もっ少し、話を聞いていればなあ」と、夫がポツリと言った。

気になりながら忙しさにかまけて、その時間を作れなかった事を悔んでいた。健一さんはサンジュエルメロンを作っていた。黄色いメロン。ネットはそんなにかからないが甘さは抜群。「太陽の宝石」と彼は自慢げに話しをした。我が家もメロンを作っているが、ネット

トがかかる、アールスメロン。いろいろ越えられない問題があつてファームへの出荷は数年前に止めた。ずっとファームへ出荷を続けて来た健一さんは、偉いと私と夫はいつも話してきたものだ。毎年、8月末ころ、メロンの選果機を借りに健一さんがトラックで我が家に来る。選果機とは、メロンを入れるとブラシが回転し、汚れを落とし大きさを毎に分別するもの。我が家は8月上旬でメロン作業は終わるから下旬から作業の始まる健一さんと時期が丁度いい。9月中旬、満面の笑顔と、お土産のサンジュエルメロンの箱を手に健一さんは、機械を返しに来る。作業場でコンテナをくるっと返して健一さんと夫・

農業ニ知識

庄内地方の作付け規模

山形県の庄内地方はお米の栽培に適した自然環境、(肥沃な土地や水源)などと云われますが、今回はその規模を少し整理してみたいと思います。

まずはなんと云っても、お米の作付け面積の推移が気になります。平成になってから見ますと、平成2年 32,100ha・平成5年34,100ha・平成10年28,100ha・平成15年27,000ha・平成19年27,400haと云う結果です。この間アップダウンはありますが、年々減少しており、全国的にも同様の傾向だろうと思います。自給率が急に注目されてきましたが、きっかけはともかく、国内産の農産物が再評価される時期が早々来て欲しいものです。その代表農産物が、お米で、あと一杯多く皆様に《ごはん》を食べてほしいと思っております。(ちなみに、27,400haは東京ドームで約5,800個、東京ディズニーランドでは、約570個の広さになるそうです)



あしがき



全国的に大雨で被害が出ている今年、庄内地方は春から好天に恵まれ特に6月に入ってから雨らしい雨が降っていません。6月中旬、大麦の収穫も順調に済み、水稲、枝豆の育苗、田植え、定植も計画的どおり進んで順調な生育が続いています。でも毎年の事なのですが、有機米に取り組んでいる組合員、今年もアクシデント続き。紙マルチ栽培は強風で紙が剥がされ植え直し、カモ放飼はカラス、イタチ、ハクビシンなどの被害にあつたら、イネミズウムシにやられるやら……、機械を使つての除草の人は汗だくで除草機を押しています。6月末にもなると、なんとかそんな田んぼの稲も立派に見えてきます。

複数の作目を手掛けている私たち、作物・野菜などの生育と天候と適期作業をたくみに組み合わせ収穫まで忙しい毎日を過ごします。

(西)

良一は煙草をふかしながら、暑かった夏のメロンとの戦いに花を咲かせる。6月18日。米国絵本作家 ターシャ・テューダー 92歳で亡くなった。自然の中でたくさんの木や花や動物たちに囲まれ、絵本もいっぱい描いている。奇しくも健一さんと同じ日に…